建設経済常任委員会行政視察研修報告書

建設経済常任委員会は、平成27年6月24日～26日の3日間の日程で北海道北部に位置する紋別市、下川町、名寄市を訪問し、それぞれの優れた行政を視察してまいりました。参加者は、笹沼昭司委員、加藤朋子委員、永井孝叔委員、鈴木恒充委員、手塚定委員及び事務局職員1名、そして私、渋井康男であります。

最初の視察先、紋別市では「観光エリアの再整備」について、翌日訪問した下川町では「バイオマス産業都市構想」について、また名寄市では「6次産業の振興」についてそれぞれ研修しました。

北海道紋別市

○観光エリアの再整備について

6月24日は北海道紋別市役所を訪問しました。

紋別市は人口23,600人（面積830.7㎢、一般会計規模170億円）流氷砕氷船ガリンコ号で有名な流氷観光を核としてきました。紋別市沿岸地エリアに位置するガリヤ地区は、平成3年、流氷について通年にわたり学習できる流氷博物館「道立オホーツク流氷科学センター」が建設されたことを契機に、流氷観光の拠点地区として、また、ドライブ観光等における紋別市の玄関口として、観光およびレクリエーション施設の集積エリアとして整備されてきました。

紋別市　研修風景

近年、温暖化の影響で流氷が少なくなっており、観光入込も右肩下がりで推移しているとのことでした。紋別市の観光は「流氷」に大きく依存しており、流氷依存からの脱皮と流氷期以外の魅力度向上を図ることが課題となっていました。今後、多くの観光客を誘致するためには、ガリヤ地区に展開する氷海展望塔「オホーツクタワー」、流氷科学センター「ギザ」、紋別市健康プール「ステア」、オホーツクとっかりセンター「ゴマちゃんランド」、カリヨン広場、道の駅「オホーツク紋別」、海洋交流館、

第三防波堤「クリオネプロムナード」、人口海水浴場「ホワイトビーチ」、ガリンコ号Ⅱなど、市中心部との連携強化に努めていくとしています。また、近年急増している東アジアからの観光客を誘致することにより、交流人口の拡大、雇用の創出、産業・経済の活性化を目指しているとのことでした。そして新たに、観光の目玉としてアザラシと触れ合えるアザラシシーパラダイスを建設していました。アザラシの自然環境一体型展示施設です。観光と生物保護の両立を実現させており、日本で唯一の施設となるとのことです。

紋別市　オホーツクとっかりセンター

説明終了後、現地視察へ向かい、ガリヤ地区のオホーツクとっかりセンターと流氷科学センターへ行きました。一年中流氷を体感できる施設として－20℃厳寒体験室を案内していただきました。

住友林業㈱が平成28年の運用開始に向け、日本一の規模となる木質バイオマス発電所を建設していました。

現在、紋別空港はＡＮＡの一日一便が就航しています。道北部への観光誘客の魅力をアップしてアクセスの改善を図るためにも、海外を含めて旅行業者とのタイアップ企画が重要と思われました。

北海道下川町

〇バイオマス産業都市構想について

6月25日午前中は、北海道下川町を訪問しました。

下川町は人口3,500人（一般会計規模50億円）、北海道の北部に位置し、スキージャンプの葛西紀明選手の地元としても有名であります。

町の面積644㎢（東京23区相当の面積）のうち約9割が森林で農業、林業を基幹産業としています。町内森林面積の約85％は国有林で、この恵まれた大地と積雪寒冷地のハンディを地域の優位性と捉え、森林・林業では、半世紀にわたる愚直な植林活動を通し、持続可能な森林経営の基盤を構築してきました。農業においては、高齢化を見据えるとともに、寒暖の差を活かした施設栽培に取組み、高収益農業を展開してきています。こうした中、昭和56年以降、間伐材

下川町　木質原料製造施設

のカスケード利用による新たな産業創出を図り、地域の雇用創出産業につなげるとともに、平成16年度以降は北海道初の木質バイオマスボイラー導入にも取組み、地域経済の活性化を図ってきました。平成20年「環境モデル都市」に認定され、平成23年には「環境未来都市（森林未来都市）」、そして平成25年「バイオマス産業都市」の認定を受けました。

下川町　一の橋地区　地域熱供給システム

木質バイオマスボイラーを使ってトマトの育苗ハウス、高齢者複合施設、役場周辺、市営住宅、小学校・病院地域の熱供給施設として活用していました。間伐材などからチップ状の木質燃料を供給する施設があり、中にはドイツ製のクローラー型自走式切削チップ製造機があり、組合組織がつくられて指定管理されていました。またスイス製の木質バイオマスボイラーには重油ボイラーも予備機として設置されていました。今後はバイオマス発電を含めてエネルギーの完全自給を目指すとしていました。

説明終了後、現地視察へ向かい、下川町木質原料製造施設、下川町役場周辺地域熱供給システム、一の橋地区バイオビレッジを案内していただきました。小さな町ですが、しっかりと地元の森林資源を活かして、活性化に取り組む姿勢は評価できるものでした。

名寄市　研修風景

北海道名寄市

〇6 次産業の振興について

6 月 25 日午後は、北海道名寄市を訪問しました。

名寄市は人口 28,800 人（面積 535.2 ㎢、一般会計規模 232 億円）、もち米作付け面積日本一、アスパラガスは北海道一の作付けを誇る農業を基幹産業とするまちです。

もち米を「まちの宝物」と位置づけ、もち米の歴史や食文化について市民をはじめ

多くの方に理解してもらい、地産地消・消費拡大へとつなげる事を目的に「もっと！もち米プロジェクト」を実施しています。主な取組みとして、もち米を使ったレシピ集の作成・配布、もち米文化を広める冊子「名寄もち米物語」を作成し、小・中・高等学校に配布、もち米サポーターの養成など実施しています。平成 25 年には、農林水産省の「日本の食を広げるプロジェクト」に応募、採択されました。名寄産もち米は「柔らかくて硬くなりにくい」特性があり、伊勢名物【赤福】の原料に指定されているほか、お菓子の加工など、全国での消費拡大に努めています。また、地産地消フェアの開催や農産物直売所マップの作成、道の駅にも農産物直売所を設置し、農家が直接小売できるシステムを取り入れました。

耕作面積は 10,400ha あり、水稲、小麦、馬鈴薯、てんさい、大豆、小豆、そば、アスパラガス、玉ねぎ、かぼちゃ、スイートコーンなど豊富な種類の農産物を生産していて、日本の食料基地という感じでした。また、名寄市内には、東京ドーム約 10 倍のひまわり畑があり、油用、農業用、観賞用を含め栽培されています。油用ひまわりの種から搾り取られた「ひまわり油」は、健康食用油として、オレイン酸及びビタミンＥを多く含んでいます。

道の駅人気商品「ソフト大福」

説明終了後、道の駅「もち米の里☆なよろ」へ行きました。名寄産もち米を使った大福やおはぎといった地元特産商品が豊富にそろっていることなどが評価され、北海道内、道の駅満足度ランキングでは常にベスト 10 入りとなっているとのことです。

施設内には、もちつき実演ブースやそばひき実演ブースもあり、大変賑わっていました。ＪＡ道北なよろと連携して積極的な農業と 6 次産業化に取組んでいる印象でした。また、地元のコミュニティ放送「エフエムなよろ」が 2008 年施設内にサテライトスタジオを設置し、地元の話題やイベント・道路情報などを発信しているそうです。

以上、建設経済常任委員会は北海道紋別市、下川町、名寄市の 3 市町の行政視察を実施しました。農業・商工業・観光の活性化等、地産地消の取組み、6 次産業の推進を図るための参考となる大変有意義な研修となり、現地を訪問しなければわからない貴重な情報を得ることができました。今後のさくら市に参考とすべき貴重な行政視察となりました。

以上報告いたします。